

耳鼻咽喉科領域の雑誌

— 論文投稿を中心に —

西岡慶子

1. はじめに

初めて論文を書き、それが雑誌に印刷、掲載され、別刷を手にした時のあの思い出は誰しも新鮮で懐かしい。しかし生涯において発表した多くの論文のうち、世界の医科学の進歩、発展に寄与できたと自他共に思われる論文は往々にしてあまりないものである。耳鼻咽喉科領域には他の科に見られないいくつかの特殊性がある。すなわち、第一に聴覚、平衡、味、嗅覚などの感覚器が包括されることから、それらの感覚生理、解剖、機能に関する分野が古くから研究の対象となってきた。特に、平衡、聴覚機能の学術的研究成績はそれぞれの専門学会に報告のかたわら、論文として著述された。また中耳、副鼻腔は鼻腔、咽頭部の末端に存在する呼吸器系の一部を構成しており、臨床でも重要な位置をしめる。特に中耳は伝音系の一端を担い、その部の炎症、免疫などに関する基礎的研究や鼓室形成術に代表される手術的治療法の歴史の変遷がここ十数年の論文に如実にうかがわれる。次に当科領域に発生する腫瘍は、構成器官、組織の多様性のために他に類を見ないほどに多彩である。これらの腫瘍における病理学、腫瘍免疫、遺伝子分析などの基礎的研究、臨床ではCT, MRI, 超音波などによる診断技術の飛躍的進歩とあまって手術、化学療法、放射線療法などの治療法の発展などが論文として報告され、当科領域の医学は飛躍的進歩を遂げた。

このような論文執筆も、誰しもごく始めの頃は

指導教官によって全般にわたり詳細な校閲があり、投稿先の雑誌もあらかじめ決められることが多いが、自身で書き始めるとなると、現今のように気の遠くなるような雑誌の種類と専門分野の過多にまず辟易し、ましてや英文となると、始めからあきらめている者も少なくない。ここに最近の主な邦文、英文雑誌の内容を紹介すると共に投稿にあたっての注意点など、私の乏しい経験をもとに当科領域の邦、英文論文執筆に関して概略を述べる。

2. 耳鼻咽喉科における邦文雑誌

(1) 総合雑誌

種類を下記に示した。

- ①日本耳鼻咽喉科学会会報
- ②耳鼻咽喉科・頭頸部外科
- ③耳鼻咽喉科臨床
- ④耳鼻と臨床
- ⑤耳鼻咽喉科展望
- ⑥JOHNS

①日本耳鼻咽喉科学会会報

Journal of Otolaryngology of Japan

[日耳鼻: J Otolaryngol Jpn]

日本耳鼻咽喉科学会が編集、発行している雑誌で現在95巻を数え、主として研究論文が投稿されている。以前は学位論文のため単独名が多かったが、最近では共著が増え、日本では権威のある雑誌の一つであり、内容も高い水準を保っている。当科領域の全分野を網羅しているが、やはり年代によって世界的な流行のテーマの影響を受けている。最近の数年では投稿、掲載された論文は以下のような分野に分かれている。すなわち、解剖学

的部位別で見ると、耳科学領域が約30～40%、鼻副鼻腔15～20%、口腔、唾液腺に関する論文が5～6%、扁桃その他咽頭部7～13%、喉頭7～10%となっている。また研究方法別では生理(聴覚)、病態生理に関する論文が最も多く20%前後を占め、次に形態、組織(含電顕)、解剖学13～19%、物理化学、生物学、数学統計13～17%が続き、病理解剖、病理組織学6～14%となっている。長編の論文は敬遠され、15枚以上のものは掲載されない規定がある。

②耳鼻咽喉科・頭頸部外科

Otolaryngology Head and Neck Surgery
(Tokyo)

[耳喉頭頸：Otolaryngol-HNS]

この雑誌は1928年、久保猪之吉先生により創刊され古い歴史を持つ。臨床医の多くがまず購読するのがこの雑誌といわれるほど、日本では普遍的であり、臨床に重点が置かれている。トピックスと題して臨床上の話題、手術、治療法、疾病に関する特集をしばしば企画し資することも多い。原著は症例報告例が比較的多く、また腫瘍のそれも多いことから実地臨床家にとっても得がたい雑誌である。第1ページの巻頭を飾るのは「目でみる耳鼻咽喉科」で、きれいなカラー写真によって構成されている。基礎、臨床を問わず、適切な発表材料が得られるならば是非投稿されたい。やはり原稿は400字詰、原稿用紙15枚以内、引用文献20を上限としている。

③耳鼻咽喉科臨床

Practica Otologica (Kyoto)

[耳鼻臨床：Pract Otol (Kyoto)]

以前は平衡機能、前庭迷路に関する論文が比較的多かったが、最近はバランスよく、各分野における研究論文が増えている。投稿者はやはり京都、大阪、神戸など関西地方の大学、診療施設の医師が多い。論説、カラー図説、臨床と続いて研究論文、最後に薬物に関する最新情報の論文を掲載している。研修ノートも捨てがたい。記念論文集や補冊も多い。

④耳鼻と臨床

Otologia Fukuoka

[耳鼻：OTOLOGIA FUKUOKA]

九州を中心に論文投稿者が多い。前述の臨床雑誌と特に変わらないが、新しく開発された薬剤の治験成績が多く取り上げられている。最近では地方において行われた教育パネル、九州めまい研究会、頭頸部癌懇話会などの講演記録が紹介され、宿題報告も別冊として出版されている。また年1回国内における耳鼻咽喉科学の発表論文が部位別に編集されており、これは大変貴重である。国内の研究情勢を把握する上にも一読の価値がある。

⑤耳鼻咽喉科展望

Oto-Rhino-Laryngology Tokyo

[耳展：O.R.L. Tokyo]

まずこの雑誌を手にとると、特異な表紙に目を奪われる。通読するとわかるが、毎号何らかの耳鼻咽喉科に関係する歴史的人物や、診療、手術器具、事物、事柄などが丹念に実証され表紙を飾っている。編集者のたゆまぬ御努力に脱帽するほかない。特に他誌と変わらないように思うがケースノートの症例報告、手技工夫、補修解説、サロンなど実地臨床家にとって役に立ち、楽しい読み物でもある。補冊は薬剤関係の論文や単独の研究論文が多く、これは学位論文として書かれたものであろう。

⑥JOHNS

Journal of Otolaryngology, Head and Neck Surgery

この雑誌はどちらかというと耳鼻咽喉科研修医、開業医、医学生などを対象に編集発行されており、全て編集部からの投稿依頼による。内容も充実しており、特集号は日々の臨床に役立ち有用である。

(2) 専門雑誌

内容の紹介は紙面の関係で省略するが下記のような雑誌がある。

①Audiology Japan [AUDIOLOGY JAPAN]

②Otology Japan [Otol Jpn]

旧臨床耳科 [Cli Otol Jpn] と

Ear Research Japan [Ear Res Jpn]

が統合。

③日本鼻科学会誌 [日鼻誌：Jap J Rhinol]

④口腔咽頭科 [口咽科：Stomato-pharyngol]

⑤喉頭 [Larynx Jpn]

⑥頭頸部腫瘍 [頭頸腫瘍：Head Neck Cancer]

表1. 世界における耳鼻咽喉科欧文総合・専門雑誌

ACTA OTO-LARYNGOLOGICA	: SWE 12N
ACTA OTO-RHINO-LARYNGOLOGICA BELGICA	: BEL CA6N
AMERICAN JOURNAL OF OTOLARYNGOLOGY	: USA B-M
AMERICAN JOURNAL OF OTOTOLOGY	: USA B-M
ANNALES D'OTO-LARYNGOLOGIE ET DE CHIRURGIE CERVICO FACIALE	: FRA 8N
ANNALS OF OTOTOLOGY, RHINOLOGY & LARYNGOLOGY	: USA M
ARCHIVES OF OTOLARYNGOLOGY - HEAD & NECK SURGERY	: USA M
AUDIO-DIGEST SPECIAL SERVICE: OTOLARYNGOLOGY (CASSETTE TAPE)	: USA S-M
AUDIOLOGY	: CHE B-M
BULLETIN SIGNALÉTIQUE DU CNRS (E72:OTO-RHINO-LARYNGOLOGIE-STOMATOLOGIE-PATHOLOGIE CERVICOFACIALE)	: FRA M
CLINICAL OTOLARYNGOLOGY AND ALLIED SCIENCES	: GBR 6N
DISEASE OF ESOPHAGUS	: ITA 3N
DYSPHAGIA	: DEU 4N
EAR, NOSE AND THROAT JOURNAL	: USA M
EUROPEAN ARCHIVES OF OTO-RHINO-LARYNGOLOGY	: DEU 6N
EXCERPTA MEDICA(11:OTORHINOLARYNGOLOGY)	: NLD 10N
FOLIA PHONIATRICA	: CHE B-M
GULLET	: GBR 4N
HEARING JOURNAL	: USA M
HEARING RESEARCH	: NLD 18N
HNO	: DEU M
JOURNAL OF AUDITORY RESEARCH	: USA Q
JOURNAL FRANCAIS D'OTO-RHINO-LARYNGOLOGIE	: FRA 10N
JOURNAL OF LARYNGOLOGY AND OTOTOLOGY	: GBR M
JOURNAL OF VESTIBULAR RESEARCH	: GBR 4N
JOURNAL OF VOICE	: USA Q
LARYNGOLOGIE RHINOLOGIE OTOTOLOGIE	: DEU M
LARYNGOSCOPE	: USA M
OPERATIVE TECHNIQUES IN OTOLARYNGOLOGY	: USA Q
ORL: JOURNAL FOR OTO-RHINO-LARYNGOLOGY AND ITS RELATED SPECIALTIES	: CHE B-M
OTOLARYNGOLOGIC CLINICS OF NORTH AMERICA	: USA B-M
OTOLARYNGOLOGY-HEAD AND NECK SURGERY	: USA M
PERIODONTOLOGY 2000	: DNK 3N
REVUE DE LARYNGOLOGIE, OTOTOLOGIE, RHINOLOGIE	: FRA 7N
SCANDINAVIAN AUDIOLOGY	: SWE 4N
SEMINARS IN SPEECH AND LANGUAGE	: USA Q
ZENTRALBLATT HALS-NASEN-OHRENHEILKUNDE PLASTISCHE CHIRURGIE AN KOPF UND HALS	: DEU 26N

表 2. 日本で発行され Index Medicus に収録されている英文雑誌

1	ACTA MEDICA OKAYAMA	(OKAYAMA)
2	ACTA PATHOLOGICA JAPONICA	(TOKYO)
3	ARCHIVES OF HISTOLOGY AND CYTOLOGY	(NIIGATA)
4	AURIS, NASUS, LARYNX	(TOKYO)
5	BULLETIN OF OSAKA MEDICAL COLLEGE	(OSAKA) (F: ... SCHOOL)
6	BULLETIN OF TOKYO MEDICAL AND DENTAL, UNIVERSITY	(TOKYO)
7	FUKUSHIMA JOURNAL OF MEDICAL SCIENCE	(FUKUSHIMA)
8	HIROSHIMA JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES	(HIROSHIMA)
9	INDUSTRIAL HEALTH	(KAWASAKI)
10	JAPANESE CIRCULATION JOURNAL	(KYOTO)
11	JAPANESE HEART JOURNAL	(TOKYO)
12	JAPANESE JOURNAL OF CANCER RESEARCH (F: JAP. J. CANCER RES. GANN)	(TOKYO)
13	JAPANESE JOURNAL OF CLINICAL ONCOLOGY	(TOKYO)
14	JAPANESE JOURNAL OF MEDICAL SCIENCE AND BIOLOGY	(TOKYO)
15	JAPANESE JOURNAL OF OPHTHALMOLOGY	(TOKYO)
16	JAPANESE JOURNAL OF PHARMACOLOGY	(TOKYO)
17	JAPANESE JOURNAL OF PSYCHIATRY & NEUROLOGY	(F: FOLIA PSY...)
18	JAPANESE JOURNAL OF SURGERY	(TOKYO)
19	JAPANESE JOURNAL OF VETERINARY RESEARCH	(SAPPORO)
20	JOURNAL OF ANTIBIOTICS	(TOKYO)
21	JOURNAL OF BIOCHEMISTRY	(TOKYO)
22	JOURNAL OF DERMATOLOGY	(TOKYO)
23	JOURNAL OF ELECTRON MICROSCOPY	(TOKYO)
24	JOURNAL OF NIHON UNIVERSITY SCHOOL OF DENTISTRY	(TOKYO)
25	KEIO JOURNAL OF MEDICINE	(TOKYO)
26	KITASATO ARCHIVES OF EXPERIMENTAL MEDICINE	(TOKYO)
27	KOBE JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES	(KOBE)
28	KURUME MEDICAL JOURNAL	(KURUME)
29	MICROBIOLOGY & IMMUNOLOGY	(TOKYO)
30	NAGOYA JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES	(NAGOYA)
31	OKAJIMAS FOLIA ANATOMICA JAPONICA	(TOKYO)
32	OSAKA CITY MEDICAL JOURNAL	(OSAKA)
33	SCIENCE REP RES INST TOHOKU UNIV SER C MEDICINE	(SENDAI)
34	TOHOKU JOURNAL OF EXPERIMENTAL MEDICINE	(SENDAI)
35	TOKAI JOURNAL OF EXPERIMENTAL AND CLINICAL MEDICINE (ISEHARA)	(ISEHARA)
36	TOKUSHIMA JOURNAL OF EXPERIMENTAL MEDICINE	(TOKUSHIMA)

- ⑦日本気管食道科学会会報〔日気食道会報：Jpn Broncho-esophagol Soc〕
- ⑧耳鼻咽喉科免疫アレルギー〔耳鼻免疫アレルギー：JJIAO〕
- ⑨音声言語医学〔音声言語医：Jpn J Logop Phoniatr〕
- ⑩Congenital Anomalies〔Cong Anom〕
- ⑪小児耳鼻咽喉科〔小児耳鼻：Pediatric Otorhinolaryngology Japan〕

3. 耳鼻咽喉科領域における各国の雑誌

(1) 各国における雑誌

国際的には表1のような総合雑誌や専門雑誌が刊行されている(丸善外国雑誌カタログ; 医学編)。

なお発行国はUSA(アメリカ)、SWE(スウェーデン)、BEL(ベルギー)、FRA(フランス)、CHE(スイス)、ITA(イタリア)、NLD(オランダ)、DEU(ドイツ)、GBR(イギリス)、DNK(デンマーク)である。

(2) 英文総合雑誌

これらの総合雑誌のうち、私が今までに良く読み引用した英文5大雑誌をあげると以下のような(カッコ内は発行部数)。またこれらの雑誌は世界で引用頻度の最も多い雑誌となっている。

- | | |
|---|------------|
| 1 Archives of Otolaryngology-Head and Neck Surgery | (12,000) |
| 2 Laryngoscope | (8,100) |
| 3 Annals of Otolaryngology, Rhinology & Laryngology | (5,900) |
| 4 Acta Otolaryngologica | (2,100) |
| 5 Journal of Laryngology and Otology | (1,000) |

Acta Otolaryngologicaは従来基礎的、実験的研究論文が多いことで知られているが、最近では臨床的論文が増加している。分野は多岐にわたるが内耳に関する論文が一番多いように思う。著者は日本人が多く、突出しているがこれは日本の耳鼻咽喉科臨床医が基礎研究を盛んに行っていることにもよる。その他の4誌はおおむね臨床研究の

論文が多い。Laryngoscopeなどはその雑誌名から受ける印象と異なり、諸分野の広い範囲での研究報告が掲載されているが、私もよく投稿している雑誌である。

最近では症例報告がなかなか採用されない傾向にあるが、Journal of Laryngology and OtologyにはClinical Recordsと称して稀な症例報告の論文が毎号数篇掲載されている。

4. 日本で編集発行されている英文雑誌

基礎医学、臨床の各分野の学会や大学などが編集刊行している英文雑誌は85誌を数える。このうちでIndex Medicusに収録されている36誌を表2に示した。耳鼻咽喉科関係の雑誌ではAuris Nasus Larynxがある。なるべくこのような雑誌に投稿し、コンピューターによる文献検索の際に投稿の論文名が出て欲しいものである。

5. おわりに

以上のような雑誌に投稿するにあたっては、まず投稿を希望する雑誌を購入あるいは一読することが肝要である。入手困難であれば普遍性に欠け、読めば報告内容の程度の高低がおのずと理解できる。次に最新号の投稿規定を熟読することである。特にここで私はなるべく英語(あるいは得意な外国語)による論文を書くことをお勧めしたい。一般に世界で発表される論文の中で日本語の占める割合は低く、日本人以外の読者はほとんどないといつてよい。極端に形容すれば、外国人にとって残念ながら日本語はアラビア文字にも似て、奇怪、不明の文字である。最近、抄録と図表は英語で表現する規定を採用した雑誌もあるようだが、これも内容の一部を窺い知るのみで隔靴搔痒の感があり、全文を英語表現にして始めて著者の研究の意図や結果が十分に理解されるのである。

英文論文執筆に際しては和文論文をそのまま英訳したのではなかなか採用されないことがある。特に考察など和文では饒舌に過ぎて講義調になったりするが、これは英文では感心しない。より新しい着想や発見を科学的に理論的に明快に著述し

で始めて採用される。名文でなくとも、どのくらい着想や結果が "new", "neues" であるかで採否は決まるように思う。ゆえに対象材料や結果はともかくとして、discussionで著述する際には日本語の場合と違った、なぜ new であるかという、他の追従を許さぬほどの、核心を突いた厳しさが要求される。我が国の論文の中には諸外国の著名な研究者の調査成績を一つのヒントにして症例数や実験数を重ね、それを肯定したような論文が時に散見されるが、英語で世界に問う場合には、これはあまり通用しないことを銘記すべきである。

さて、投稿した論文に対してレフリーからコメントが送られてくれば、これは充分採用の可能性があると考えてよい。国内外を問わず厳しいコメントが付されて返ってくるのが通例であるが、多くの初心者はこのコメントに辟易して再投稿をあきらめてしまう。しかし、このコメントを注意深く読んでみると文中に多くの示唆が隠されていることがある。ゆえに、コメントの示唆を生かしつつ自身の見解を述べ、あるいは場合により実験結

果を付加して一層内容の充実した論文として提出すればよい。これらの作業に関しては良い手引書が発行されているので、参考にされたい(たとえば、『科学者のための英文手紙の書き方』黒木登志夫ほか 朝倉書店、『Dr.ロビンスの上手な英語医学論文の書き方』国際医学情報センター編 医学書院、『実例による医学英語論文の書き方』引地岳雄 メジカルビュー社 ほか)。

それでも採用されない場合、英文を書き直し再度日本語で邦文雑誌に投稿してもよいが、できることならば内容を検討し日本で発行されている英文雑誌にトライしてみることである。昨今では和文英訳を専門としている業者や、母国語の英語で医科学論文をチェックする者も増加しているので、これらの人々の語学力、知識を文中で有効に利用することを勧めたい。

以上、耳鼻咽喉科における邦文ならびに世界の諸雑誌を紹介し、特に英文による論文投稿に際しての要点を簡単に述べた。

第67回研修会プログラム

平成5年3月29日(月) 10:00~12:00
淀川キリスト教病院 会費 500円

《事業報告会》

1. 当図書室の個人図書購入斡旋について
山崎 捷子(淀川キリスト教病院)
2. 2年間の図書室業務を振り返って
松田智恵子(大阪府済生会泉尾病院)
3. 丸善外国雑誌の一括発注方式を利用して
七浦 紀子(大津赤十字病院)
4. 図書室の年次報告書の作成
木下久美子(高山赤十字病院)
5. 院内報の発行
首藤 佳子(星ヶ丘厚生年金病院)

第19回総会のお知らせ

日時:平成5年3月29日(月) PM 2:15~4:00
場所:淀川キリスト教病院 本館5階講義室

特別講演

(平成5年3月29日、PM 1:00~2:00)

「科学の芽ばえとその発展」

講師 檜 學先生(島根医科大学前学長)
京都大学 名誉教授